

している十二名の研究者とともに、最新の研究成果を盛り込んだ本書を上梓した。編者とともに、いささかなりとも近世災害史の研究を進めてきた筆者にとっても、嬉しい限りである。

本書を貫くテーマは「復興」「復旧」であり、編者は、本書の課題を社会や人間の生活回復は、災害後どのように果たされたのかを追究することにあると述べる。つまり、歴史災害における「復興」こそが、国家の力量や地域の人々の力といった、人間とそれに関わる社会の「力」を示す指標になるからという。ここに、編者の災害と国家にかかわる歴史観が見事に表出していると言える。このような堅牢な史観に基づいて編纂された本書は、読者にとってあるいは息苦しい印象を与えるかもしれないが、災害の歴史と実相を分かりやすく解説し、豊富な図版に加えて引用史料も書き下し文にするなど、各所に行き届いた配慮がなされており、災害史入門の機能も果たしている。それでは、以下に本書の構成と内容を簡単に紹介することにしよう。

「古代の災害」の章は、「環境と災害の心性史」「災害と環境」「神話・説話・記録に

北原糸子編

『日本災害史』

長谷川成一

長年にわたって、近世・近代の災害史研究を牽引してきた、本書の編者である北原糸子氏は、このたび、右研究の一線で活躍

みる災害」「天仁元年・浅間山噴火」の四つの論稿からなっている。内容は、古代の人々が災害をどのように捉えたのか、古代の災害認識と災害観が形成され変容していく過程、古代史料が災害史を扱う難しさと問題点に言及する。考古学的な発掘と検証により、具体的な事例として天仁元年（一一〇八）の浅間山噴火を取り上げ、火山灰などを利用した考古学的調査によって復興行政や被災後の村落の様子までも明らかにしている。

「中世の災害」の章は、「災害と環境への視点」「中世の災害観」「開発と災害」「都市災害」「中世の災害対応」の五つの論稿から構成されている。内容は、鴨長明の『方丈記』を素材として、安元三年（一一七七）の京都大火や福原遷都、辻風など具体的な事例から都市災害について検討し、中世後期には都市を保全・防衛するシステムを形成していったことを示す。中世の災害対応として、宗教・工学・農学・社会の各分野からそれぞれの対応をまとめる。

「近世の災害」の章は、「救済と復興」「河川災害と地域社会」「近世における災害救済と復興」「災害と情報」の四つの論稿か

ら構成されている。内容は、安政江戸地震や善光寺地震、島原大変などの具体例を挙げ、幕府や各藩、また被災地域を取り巻く社会や民衆が、どのように災害に対応していったのかを検討する。近世に至って、各階層で記録された史料も多様化し、災害記録もそれまでにない程多くの種類が見られるようになった。鯉絵に代表される瓦版・錦絵が担った情報の力や、「名所江戸百景」

のような非文字史料に見られる景観の描写も検討し、近世の災害像をさらに明確にしている。そして、近世の災害対応には、繰り返される水害のほかにも突発的な地震・津波などの災害において危機管理とも言えるべき救済マニュアルが存在し、それに従う形で災害対応が行われた点も明らかにしている。

「近代の災害」の章は、「国家と救済」「近代法に基づく災害救済の実際」「河川行政と災害」「関東大震災と復興」の四つの論稿で構成されている。内容は、浜田地震や濃尾地震、河川災害などを例に、近世期と比較して救援や復興がどの程度進歩したのか、法治国家として成立した近代日本では、どのように災害に対応したのかという部分

がクローズアップされている。近代日本は、全国一様な災害対応を行う必然性があったが、初期の段階では、災害の様相自体は近世と大きな変化はなく、近代的な治水が行われるようになるのも明治中期以降という。関東大震災に関しては、横浜における関東大震災と復興の問題について述べている。

「阪神・淡路大震災」の章は、「大都市の崩壊・大規模化する被害」「復旧から復興へ」の二つの論稿からなっており、同震災は発生から復興までをつぶさに観察できた稀な歴史災害だと位置づけ、震災を通して明らかになった時代の矛盾や不合理を直視し克服することが復興への道筋をつけることだと述べる。

各章の後に掲載されたコラムは、「九州の火山と日本神話」「地震考古学からみた日本列島」「日本における歴史津波」「仙台北本丸石垣と地震」などがあり、小品ながらも力作である。なかでも、関東大震災の死者・行方不明者の数値を検証した「関東大震災」、新潟県中越地震の事例報告である「地震から文化財を守るために」は注目され、各研究分野からの多彩なアプ

ローチが本書の内容をいっそう豊かにしている。

編者は、「あとがき」で本書は災害史の口火に過ぎず、残された課題の解明に取り組んでいかなければならないという。同感である。将来、各地での大災害が予想される我が国にあって、防災を担当する行政の方々はもちろん、これから災害史を志す若い研究者にとっても、本書は必読の書であることを確信している。

（はせがわ・せいいち 弘前大学人文学部教授）
（四六判、四八〇ページ、四四一〇円、吉川弘文館、二〇〇六・一〇刊）